

一燈照隅 万燈照国 ～稲城を照らす燈りとなれ～

2019年度 稲城青年会議所
第44代理事長 川本 真治

【はじめに】

「一つの燈りでは一隅しか照らせないが、その一隅の燈りが万に上るほど集まれば、国をも照らす燈りになる」

この言葉は、天平宝字4年（760年）とも、天永3年（1112年）の開基、創建とも言われ、一説では稲城市最古刹ともされる 神王山 北辰妙見寺の寺院宗派である天台宗の宗祖 伝教大師最澄上人が、今に伝えた「一燈照隅 万燈照国（いっとうしょうぐう ばんとうしょうこく）」という言葉です。私はこの言葉を信条としています。似たような言葉で「塵も積もれば山となる」という言葉もありますが、重要な違いとして「一燈照隅 万燈照国」は、ただの数力ではないということです。「自らが燈りとなり周りを照らす」という、現状に変化を起こすことに意味があります。その行動が、その一仕事、その一言、その一歩が変化をもたらします。その一つ一つの小さな変化が、数えきれないほど集まれば、やがて大きな変化につながると信じます。そして、稲城青年会議所は「一燈照隅 万燈照国」を合言葉に、自ら一人一人が稲城を照らす人材となれるよう研鑽を積み、その燈りを結集して稲城中を照らしてまいります。

【己が住み働くまちの市民としての誇り～シビックプライド～】

突然ですが、皆さんは「稲城」が好きですか？ 私は稲城が好きです。

東京は江戸川区で生を受け、18歳で江戸川区を出てから様々なまちで勤め、引っ越し、色々なまちで生活をしてきました。どのまちも「住めば都」「働けば都」、良いまちではありましたが私は地域の方々と繋がりを持つこともなく、スーパーやコンビニなど生活に必要なお店がどこにあるか程度しか興味がありませんでした。現在は稲城市に縁を持って7年目、そんな自分も今は「稲城」が自分の地元だと思い、稲城が好きだと公言しています。

19世紀イギリスで起こった産業革命で、多くの村が近代都市へと変貌しま

した。これに伴い、都市の主役が王侯貴族や教会から中産階級の市民へと変わり、市民の働きかけで様々な公共施設が作られ、近代市民社会が始まりました。この、自分たちが文化を勝ち取り、自分たちなりに誇りと力を持ってまちをつくり、動かし、率先して都市の課題に向き合っているのだという自負をシビックプライドと言います。日本語の「郷土愛」といった言葉と似ていますが、単に地域に対する愛着を示すだけではないのです。

ある調査では「地元が好きか」という問いに対し、実に9割以上の方が「好きだ」「どちらかと言えば好きだ」と答えています。別の調査では「地域活動に関わっているか」との問いに対し「地域活動に関わっている」と答えた人は約1割となっています。もし、残り9割の方々がシビックプライドを持ち、地域活動に関心を持ったとしたら、稲城はさらに、今以上にみんなが暮らしやすく働きやすいまちとなっていくのではないのでしょうか。そのような人たちが一人二人三人と増えていくことこそ、まさに一燈照隅 万燈照国です。

私も今では、稲城で起こる様々なことに興味を持ちます。色々なまちに暮らし、勤め、そのまちまちに興味を抱かなかったのに、なぜそこまで変わったのか？私の場合は簡単に言ってしまうと、稲城青年会議所に入会したことがきっかけです。入会当初も、そんなに稲城に興味があるとういわけではありませんでした。どちらかという、人とのつながりを広げたい程度でした。しかし、稲城青年会議所メンバーみんなと実際に活動し、皆が「我がまち稲城のために」と日夜奔走する後ろ姿をみて、また、稲城青年会議所として市内の様々な集まりやお手伝いに参加させていただく中で、多くの方々が笑いながら楽しそうに、「稲城のためならえんやこら」と地域活動をしている光景を目にし、私も気づけば稲城に興味を持ちはじめていました。何がきっかけとなるかは、人それぞれ違いますが、人は何かきっかけさえあれば興味を持つのです。

2019年は「稲城村」誕生から130年の節目となります。今から130年前の明治22年（1889年）4月1日、矢野口・東長沼・大丸・百村・坂浜・平尾の六か村は、町村制の公布に伴う町村統合によって一つの村となり、「稲城村」が誕生しました。稲城という名称は、この時に新しく命名された村名です。当時の人口は3,750人・戸数は593戸であったと言われています。また、昨年、稲城市観光協会が発足しました。本格的に稲城市を内外にPRするのはこれからです。稲城市の魅力を発見・発掘し内外に伝えるのは稲城に縁のある私たち稲城市民です。さらに本年は、4月には統一地方選挙が予定され、

最も身近な自治体の長を、稲城市民自らが選出することができる機会となります。このように一部を切り取ってみても、本年も稲城では様々なことがおきます。稲城について興味を持つ・考える・振り返るなど、自分たちのまちについて知る・興味をもってもらうには絶好の機会です。シビックプライドを持つに至るため、まずは自分が住まい暮らすまちについて、知る・興味をもってもらうことが、第一歩目であると考えます。

その一つとして、統一地方選挙告示前には公開討論会を行い、稲城市民のみなさんに稲城に向き合ってもらえる機会をつくります。また、未来を担う子供たちにも、稲城の未来をどうしていきたいのか、どうしていくのかを考えてもらうきっかけとして、稲城市内の中学生を対象に政治参画教育プログラム「みらいく」を実施し、選挙の大切さと政治がいかに身近なものであるかを感じてもらい、一人でも多くの子供たちにシビックプライドを持ってもらいます。

そして、本年度各例会では稲城について「知ってもらおう」「興味をもってもらおう」「再発見をしてもらおう」そんな体験をしてもらえる工夫を凝らしてまいります。

人は一度興味を持つと、もっと知らずにはいられません。そして実際に行動を起こしたくなります。その時、力になってくれる地域団体が稲城市内には様々あります。そんな方々に実際に地域活動に参加してもらい、あちらでも、こちらでも、笑いながら楽しそうに「稲城のためならえんやこら」と、地域活動をしている風景が日常になるよう行っていきます。

【人工知能時代を生き抜いていく子供たちのために】

身近にある人工知能のさらなる進化で、あらゆる仕事が人工知能に代替えされると言われます。文部科学省の報告によると、一説では子供たちの65%は将来、今は存在していない職業に就くだろうとのこと。子供たちが成人を迎える、今後10年～20年の間に想像もつかない変化が待ち受けています。しかし、そんな将来にも未知の仕事に就き、人生を謳歌する大人になった子供たちがいるのだらうと思います。一人でも多くの子供たちにそんな将来を送ってもらいたいです。

人工知能は答えのある問いに対して人間よりも早く正確に導き出すことができ、データを蓄積し学習することもできるでしょう。しかし一方で人は、答えのない問いに対して思考することができるのです。重要なのはここです。葛藤

することができるのが人の特性です。だからこそ人と人は、共感し思いやりを持つことができます。決して人工知能には代替えできないことです。

そこで、本年度行われるわんぱく相撲では、勝って嬉しい、負けて悔しい、もっとできたんじゃないか、たくさん練習してよかった、悔しくて泣いているあの子は大丈夫かな、やりすぎちゃったのかな、など、子供達にそんな様々な葛藤を感じてもらい、人と人との共感性や思いやりの精神を感じとってもらいます。

一昨年、昨年と、この稲城の地から、わんぱく相撲全国大会に代表者を送り出すことができました。わんぱく相撲稲城場所に参加する子供たちは、正に大人顔負けの大迫力の取り組みと、時に大逆転劇を繰り広げてくれます。本年もそんな子供たちの手に汗握る取り組みが、保護者の皆さんをはじめ皆様に見ただけのようにメンバー一同、心して運営してまいります。

そして、10月の「Iのまち いなぎ市民祭」では、小学生以下を対象に「かえっこバザール」を行います。かえっこバザールは、ただのリサイクルおもちゃ交換会ではありません。持ち寄ったおもちゃに応じて世界共通のカエルポイントに替え、そのカエルポイントでまた別のおもちゃと交換ができます。そして当日の運営にはたくさんの子供たちにボランティアアルバイトを体験してもらいます。持ってきた、おもちゃを鑑定しポイントをつけるのは子供たち、そして、仕入れたおもちゃに価値を付け仕分けをするのも子供たち、レジで清算をして交換するのも子供たちです。ボランティアアルバイトで稼いだカエルポイントで、またおもちゃを交換できる。子供たちの小さな社会が、かえっこバザールの会場にできあがります。

その小さな社会の中で子供たちなりに、モノを大切にす優しい心を養ってもらうだけではなく、「自分で考え、想像し、モノに価値をつける大切さ」や、その他にも、「頑張ってアルバイトをして、欲しいモノを手にする楽しさ」も子供たちに感じてもらいます。その原体験を持って、想像もつかない変化が待ち受ける時代を、謳歌する大人たちになってほしいと願います。

【稲城青年会議所の魅力発信と拡大】

今年の稲城青年会議所メンバーは、入会3年未満という若いメンバーが中心となります。どのメンバーも、稲城を背負う人材となり得る期待のメンバーで

すが、JC会員としての経験が浅いため、メンバー自身が青年会議所運動と稲城青年会議所の魅力を、まだまだ分かりきっていないのではないかと思います。

私が思う、青年会議所の最大の魅力は「青年の学び舎」であるということです。地域貢献を通して、様々な人に会うことができ、様々な考えを聞くことができます。そして世の中を変えるために問題点がどこにあるのか、どうすれば改善・解決ができるのかを、一人だけではなく多くの仲間たちと共に考え、実行することができます。たとえ失敗をしても一生懸命動いた人を悪く言うメンバーもいません。学びを得て、また次に活かすことができます。そして稲城青年会議所メンバーには、その機会が全員平等に目の前にあります。しかし、その機会は自分の目線よりも少し上にあります。少しだけ背伸びをすると届きません。私は多くの先輩方からいただいたアドバイスの通り、背伸びを繰り返し、様々な経験と学びを得ることができました。昨年は経験が少ないながらも、伊東理事長から専務理事の大役のお話をいただき迷いましたが、だいぶ背伸びしないといけないなと思いながらも「少し背伸びをする機会」だと捉え、「度胸と愛嬌」で専務理事を経験させてもらいました。今までの人生では縁遠かった方々にご縁を持つ機会ができ、あらためて稲城と青年会議所の魅力と素晴らしさを、身を以て実感した一年でした。そんな青年会議所の魅力を楽しんで体験してもらい、自分たちの言葉で生き活きと稲城青年会議所の魅力を皆さまに語り、こそ、最大の魅力発信になると信じます。そのために、本年は、ありとあらゆる情報をメンバーに公開し、様々な機会があることを知ってもらいます。また、参加動員を積極的に行い、「少し背伸びができる機会」を多く作ります。その体験を内外に発信できるよう、今まで活用していなかった媒体を利用し、稲城青年会議所の広報活動をさらに充実させ、例会や総会以外の稲城青年会議所の運動と活動を余すことなく発信していくことで、私たちの運動と活動を知ってもらいます。

さらには、積極的に20歳～40歳の青年を中心とした稲城市民が集まる機会と場を創出していきます。例会では稲城中から青年が集う異業種交流会を開催し、参加者皆様が情報交換やお仕事の話しや商談を行ってもらい、大きな横のつながりを作ります。その中で稲城の皆さまへ稲城青年会議所のこともご理解いただきながら、稲城のために地域のために活動したいと願う青年に入会していただければ幸甚です。一人二人三人と、一隅を照らす多くの青年が増えていくよう稲城青年会議所一丸となって拡大して行きます。

【むすびに】

2019年度 第44代 理事長という大役を仰せつかり、心の底から武者震いしております。稲城に縁を持ってまだ7年目、まだまだ地域の知らないことも多々ありますが、一年間、稲城青年会議所メンバーみんなと共に楽しみながら、地域のため、仲間のため、己のため、我がまち稲城を照らす灯りとして、運動を展開してまいります。

そして、翌年2020年は稲城青年会議所創立45周年となります。44年前の昭和50年（1975年）、私たち現役メンバーが生を受けるよりも前に、当時の稲城の諸問題に対し「目をつむることなく前向きにチャレンジしより良き結果を引き出し豊かな市民生活と調和のとれた経済力のかね備えた街にすることは我々青年に負わされた仕事であると信じます。」と設立趣意書に宣言し、私たち現役メンバーと同じように20歳～40歳であった、先輩諸兄が稲城のためにと立ち上がってくださいました。現在へ続く稲城の発展の一翼を、稲城青年会議所が担い、現在につながっていると信じます。新たに迎えた多くの仲間と共に、翌年の45周年を迎え、今後も稲城発展の一翼を担い、さらに稲城青年会議所が地域の大きな灯りとなるよう、歴史を紡いで参ります。